

「高等教育」

先日来、前文部大臣の言明や大学教官の教育行動についてのご批判がありました。政治家か科学者か、研究者か教育者かという同一人物における二分化は単純にすぎると見えるかもしれませんが、しかしながらこれは実に重大な人間の根本問題から立ち上がってくることがらと思えます。言行は一致しているか、学問と思想は分離していないか、です。残念ながら、わが国の大衆社会の中央には、言行や学問思想の一致、忌憚なく言えば一致させたいという努力、さらに言えば一致しないではいられない人格、を求め得ようもないと思うのです。このことは「高等教育」と無縁ではありません。

教育学、教育評論、教育統計など教育についての議論をいくら机上に並べても、教育しているわけではありません。それらと「行い」の間には激甚なる懸隔があります。ところで、知識や技能は伝達や訓練で習得できます。だが「精神」や「学力」は養われるものであって、右から左へと簡単に移すことはできません。人格的営為ですから。

大学入学前に養われた一般学力の上に成り立つのが「高等教育」と考えます。「高等教育」の知識や技能の伝達習得は可能です。伝達技術というものもあるでしょう。ところでさらにその先の研究者や臨床家としての研究力や医師力が養われるのは、多分「高等教育」よりも遅れます。そこは人格的営為の作業場ですから、研究者や臨床家として優れていなければ教師としても機能し得ないと、わたしは思います。美辞麗句をつらねても「行い」がそれと離反している半端な医者モデルとして、医師としての強靱な力が培われることはあり得ません。

前にもどって、「高等教育」を可能にする一般学力を会得する資質は、わたしは2, 3才から中学生くらいまでの間に形成されるとしか思えません（以前から各処で申しておりますが）。子にとって逃れようもない環境のもとで子の資質は養われ、それはこんにちの平穩時代では親が最大の要素です。生死や人生の端境に現れるひとびとの情緒と知力を見てくるとそうとしか思えません。

近年は「大学」と称する施設が増数し、「高等教育」を可能にする一般学力が養われていないものまでもその施設に入学させるようになったこと、が混乱の社会的要因と思えます。「大学」も数多ければ教官も多いわけで、とうぜん教官の資質も低下します。学生も教官も「高等教育」を満たさない大学があつて当然と思えます。わたしは、区別すべきは区別したいと思うので、「高等教育」を行う施設とそうではない施設を分けて考えるべきと思っています。すべての「大学」を「高等教育」の場としようとすることは無謀としか思えません。

医療界で言えば、この区別を明確にしないと検査医者や技能医者を生み続けても臨床家を育成できず、今日の低迷から脱却できそうもありません。（1999 年）